

# デュマ「銃士三部作」を読むー歴史と文学的想像力（1）『三銃士』

## Reading Dumas' Trilogy of Musketeers (1)

矢橋 透

Toru YABASE

フランスの文豪アレクサンドル・デュマの歴史小説『三銃士Les Trois Mousquetaires』は、小説そのものの人気もさることながら、演劇、映画さらにはテレビドラマ、漫画まで、無数のアダプテーションを生み出し、世界文学史上もっともよく知られた作品のひとつと言っても過言ではないであろう。だがデュマ自身がそのふたつの続編を著し、ルイー三世＝宰相リシュリュー時代からルイー四世の親政時代まで、半世紀に渡るフランスの歴史絵巻を描きだし、主人公ダルタニャンとその友人の三銃士の生涯をその死に至るまで辿っていることを知る人は、かなり減ってくるのではないか（1）。

ここでは、その長大な「三部作」の内容を要約紹介しながら、史実と文学的創造の関係を分析し、そこからデュマの創出した歴史像の特徴を考察して、その歴史小説が同時代の読者にたいして持った意味、また文学的魅力を明らかにしたい。そしてさらには、そのアダプテーションをも含めて、「三部作」が後世に与えた（大衆）文化史的意味をも考えてみたい。

### デュマの生涯と「銃士三部作」

最初に、デュマの生涯を簡単に辿り、そのなかに「三部作」を位置づけておこう（2）。

アレクサンドル・デュマは一八〇二年、フランス北部の町ヴィレール・コトレで、フランス人貴族と黒人女性を父母に植民地で生まれ、ナポレオン一世麾下の猛将であった父のもとで生まれている（よってデュマには、黒人の血が四分の一流れていることになる）。父がはやく亡くなったため、残された母子は苦しい生活を余儀なくされ、アレクサンドルも公証人のもとで見習い仕事をしていたが、文学に目覚め、一八二三年二歳でパリに出る。

オルレアン公爵家で秘書を務めながら、劇作を志していたデュマは、二九年歴史劇『アンリ三世とその宮廷』をコメディ・フランセーズで初演し大成功を収め、一躍ロマン派の劇作家として華々しく劇壇に登場する。ついで三一年には、今度は不倫ものの現代劇『アントニー』がポルト＝サン＝マルタン劇場で初演され、これまた圧倒的な人気を得、劇作家としての地位を確立することになる。

その後一八四〇年代からは、おりからの新聞小説ブームに乗り、もとリセの歴史教師で小説家のオーギュスト・マセとの協力体制のもと、やつきばやに歴史小説を執筆し始める。四四年三月から七月にかけ『三銃士』をシエール紙に連載、社会現象とも言うべき人気を博す。同年八月から翌年一月まで、今度は『モンテ＝クリスト伯爵』を発表、これまた空前の成功を得る。そして四五年一月から八月にかけ、『三銃士』の続編『二十年後Vingt ans après』を、四七年一〇月から五〇年一月までは、さらにその続編の大長編『ブラジュロンヌ子爵Vicomte de Bragelonne』（そのなかの一挿話が、有名な「鉄仮面」である）を、ともにシエール紙に連載し、「三部作」を完成させた。

このように破竹の勢いで成功を収めてきたデュマだが、五〇年代からその人生は急速に傾きはじめる。自作の歴史小説を劇化し上演するために鳴り物入りで始めた「歴史劇場」の経営が、二月革命の影響もあり思わしくなく、五一年には破産が決定。またもともと自由主義＝共和主義的傾向が強く、

時の皇帝ナポレオン三世に睨まれていたこともあって、収監直前にベルギーに亡命する。五四年債権者との合意ができてパリに帰り、今度はジャーナリズムに身を投じ、いくつも新聞を刊行するが、ことごとく失敗。それでも、小説のほか、回想録や旅行記さらにはグルメ本まで、最後まで旺盛な執筆活動を展開しつつ、一八七〇年、息子で『椿姫』の著者でもあるアレクサンドル・デュマ・フィスが所有するノルマンディー地方の別荘で、家族に見守られつつ、六八年の生涯を閉じた。驚異的な作品量とそれがもたらした膨大な富、それを瞬く間に蕩尽した、無数の女たちとの関係や大旅行を含む豪華絢爛たる私生活と山師的感觉——小説同様波乱万丈の一生ではあった。

### 『三銃士』の作品世界

つぎに、『三銃士』の梗概をまとめておく(3)。

物語は一六二〇年代後半、故郷の南仏の町を出た貧乏貴族の息子ダルタニャンが、軍人として名を挙げるためパリへと向かう旅のとちゅう立ち寄ったマンで幕を開ける。そこで主人公は、乗っていた馬を馬鹿にされたことから、ひとりの貴族と喧嘩になり、宿屋の主人たちも加わって袋叩きにあったうえ、父親が、友人で現在は国王付き近衛銃士隊長の要職にあるトレヴィル殿に宛てた紹介状を奪われてしまう。のちに明らかになるのだが、この相手の貴族は、時の最高権力者リシュリュー枢機卿の腹心ロシュフォールであり、彼と一緒にいた女が、同じくリシュリューの恐ろしい懐刀ミレディーであった。

母からもらった秘伝の軟膏によって、早々と傷を癒したダルタニャンはパリでトレヴィル殿の屋敷を訪ねるが、そのとき仇敵のロシュフォールの姿を見かけ、追跡しようとするうち三人の近衛銃士とつぎつぎと悶着を起し、それぞれと決闘の約束をするはめになる。その三人というのが、国王付き銃士隊の名物三人組アトス、ポルトス、アラミスであった。さて主人公が、決闘の場所であるサン・ジュルマン修道院に近い野原に赴き、決闘を始めようとしていたまさにそのとき、銃士隊のライバルである枢機卿付き護衛隊の面々が現れ、当時リシュリューが出したばかりの決闘禁止令を盾に彼らを連行しようとする(この『三銃士』という小説においては、決闘禁止令は単なる名目と化していて、銃士隊と護衛隊はことあるごとに衝突するのであり、連行は単なる挑発なのである)。この期に及んで、アトスたちが数的劣勢であることを見とったダルタニャンは、三銃士に加勢することにする。主人公の大活躍により護衛隊に勝利を収めた四人は、トレヴィル殿の紹介で国王ルイー三世に謁見し、報奨金をいただく(国王も宰相リシュリューにライバル心を持っており、銃士隊の護衛隊にたいする勝利は我がことのように嬉しいのである)。ダルタニャンは、このことにより、三人の銃士に友人として迎えられ、近衛銃士隊のポストが空くまで他の国王付き部隊のメンバーとなることになる。

ダルタニャンは、たまたま部屋を借りていた大家のボナシュー氏から相談を受けたことから、宮廷内の陰謀事件に巻き込まれることになる。大家によれば、彼の若い妻は王妃アンヌ・ドートリッシュの侍女を務めているのだが、最近宮廷のいざこざに巻き込まれ、誘拐されて行方が知れなくなっているという。その妻は、捕われから逃れやっと家に帰ってきたところを、ふたたび追手につかまろうとする。階上の覗き穴からそれを見ていたダルタニャンは、女を救出し、たちまちのうちに美しい彼女に恋をする。宮廷の陰謀事件の全貌がしだいに明らかになって来る。それは、王妃アンヌを巡り英仏両国の最高権力者が関わった恋愛事件であった。イギリス国王の美貌の寵臣で、現在かの国でもっとも勢力のあるバッキンガム公が、ことあるフランス王妃に熱愛を捧げ、それに嫉妬したりシュリューが(彼も王妃に恋心を抱いていた)、ふたりの逢瀬の事実を夫のルイー三世に示す機会を窺っているというのである。コンスタンス・ボナシュー(それが大家の妻の名前であった)は、王妃とバッキンガムの仲を取り持つ役を担っているので、枢機卿の手先につけ狙われていたのだ。さてコンスタンス

の仲介もあり、ルーヴル宮の一室でバッキンガムと密会を果たしたアンヌは、彼に、夫である国王が彼女に贈ったダイヤの飾り緒を忘れがために手渡す。ところがその事実を知ったりシュリユーは、ルイ王に王妃のための舞踏会を開かせ、彼女に件の飾り緒を身に付けてそこに臨ませることを画策し、アンヌは袋小路に陥る。コンスタンスから事情を聴いたダルタニャンは恋人に、ロンドンに乗り込み、バッキンガム公から飾り緒を取り戻してくることを約束する。ダルタニャンと三銃士は、とちゅう執拗な枢機卿の手下の妨害に会いつつも、目的のために己の身を犠牲にすることもいとわない一心同体の活躍を見せ、ついにダルタニャンひとりがロンドンのバッキンガムのもとに辿り着き、アンヌの窮状を知らせる。ところがバッキンガムが飾り緒を取り出して見ると、なんとダイヤが二個欠けているではないか。それは、リシュリユーから派遣されたミレディーが、先んじて証拠品として奪っていったのである。バッキンガムは大枚をはたいて、そっくりのダイヤを急きよこしらえさせる。それを持ったダルタニャンは、駿馬を駆って一路パリへと駆けつける……ルーヴルでは、王妃のための大舞踏会が開かれていた。最初王妃は、飾り緒を付けていない。国王に促された王妃は、侍女を呼んで宝物箱を持って来させる……そのなかには、ダイヤの飾り緒がそのままの外観で入っていた。疑いが晴れ喜ぶ国王。ほぞを噛むリシュリユーとミレディー。大殊勲を挙げたダルタニャンは、王妃の控えの間に通され、そこでアンヌから豪華な指輪を賜る……その後若き銃士は、ロンドンへの往路途上に残してきた友たちを探しに行く。彼らはみな無事であった——そしてその過程で、三銃士の私生活が明らかになって来る。見えっぱりでつねに華々しい恋の武勲を喧伝していたポルトスが、じつは姥桜の公証人の妻とねんごろなこと。アラミスが、つね日頃銃士は仮の姿ですぐに僧職に就くつもりだと言っているにかかわらず、王妃の友人で権謀術策で名高い美貌のシュヴルーズ夫人と恋仲であること。そしてアトスが、愛を捧げた妻がじつは肩に過去の罪を明かす白百合の刻印を焼きつけられていて、それを見た彼が彼女を自らの手で処刑した暗い過去を持っていることなど……

ダイヤの飾り緒事件で王妃のために大活躍したダルタニャンは、コンスタンスからパリ郊外の隠れ屋で一夜をとともにする約束を得る。ところが喜び勇んでその場に赴いた彼が目にしたのは、荒らされた無人の部屋のみであった。またもや恋人は、枢機卿の手下によって連れ去られてしまったようなのだ……こうしたこともあってか、ダルタニャンはその後、宿敵であるミレディーの妖しい魅力に惹かれていくことになる。たまたま侍女の勘違いから、ミレディーのワルド伯爵という男への恋文を手に入れた我が主人公は、ケティーというその侍女を手はずけ、ワルドを騙ることで、まんまとミレディーと一夜をとともにするところまで漕ぎつける（こうした映画などではカットされることもあるヒーローにあるまじき行為を、作者のデュマは時代の習俗〔心性?〕の違いとして正当化している）。こうした策略のすべてが露見したとき、ダルタニャンは、危険な悪女の最大の憎しみを受けることになり、実際彼はつぎのラ・ロシュルの攻囲の場面で、なんども彼女の放った刺客に襲われ、間一髪で助かるありさま。またその後悪女の魔の手は、コンスタンスにも伸びることになる……浮気の代償は高くつくことになるのだ。

さて、舞台はこののち、ラ・ロシュルの攻囲に移る。これはリシュリユーの行った最大の軍事的行動として有名な歴史的事件である。枢機卿は、プロテスタントの拠点となっており、国内の中央集権体制の支障となることの多かった大西洋に面した重要な港町を陥落させようとする。しかしそれにたいし、ラ・ロシュルを海のかなたの同じ新教徒の国であるイギリスが支援しようとし、ことは一転国際的紛争の様相を呈してくる（だがデュマは、こうした英仏の衝突の重要な要因として、リシュリユーとバッキンガムのアンヌ王妃を巡る恋のさや当てがあったとしている!）。戦闘は一六二七年、イギリス軍がラ・ロシュルの沖合に浮かぶレ島に侵攻することで開始されるが、フランス軍の激しい抵抗にあって本国に撤退。だがバッキンガムは、スペイン、ドイツ、ロレーヌ公国と密約を結び包囲網を形成して、フランスは重大な国家的危機にさらされる。それにたいしリシュリユーは、沖合に防波堤を築き、外からの侵入を阻むことで、ラ・ロシュルを孤立させ、兵糧攻めにする作戦に出る。ラ・ロ

シエルの市民は、いまや物資がほとんど尽きた状態で、バッキンガム率いるイギリス軍の到来を待つしか手がないところに追いつめられる（そんななか、ダルタニャンと三銃士とは言えば、アトスの指揮のもと、ラ・ロシェル軍から奪取したサン・ジェルヴェの砦を、従者を含めたった八人で、多数の敵軍から守りぬくという華々しい武勲を立てる）。こうした状況下において、リシュリューはある宿屋の個室でミレディーに、ロンドンに行き、バッキンガムにたいし、アンヌと彼の恋の証拠は押さえており、ラ・ロシェルから手を引かねば、王妃に迫害を加えると脅しをかけることを命じる。さらにどうしても彼が従わない場合、彼を暗殺する手段に出ることをも示唆する。ところが、こうした指令を、宿屋の暖炉管を通じて盗み聞きしたアトスは、リシュリューが去ったあと、ミレディーのいる部屋へと闖入する。じつは、ミレディーはなんと、アトスが殺したと思っていた肩に烙印を持つ元妻だったのだ！そして彼女から、国家の利益という立場からあらゆる非常手段が許されるとした（これはダルタニャンへの復讐を念頭に置いて彼女が手に入れたものであった）枢機卿自筆の赦免状を奪い取り、友人であるダルタニャンに危害を加えようとすれば、彼がかならず彼女を成敗することを誓う。以上のようなことの次第を聞いたダルタニャンは、貴族どうしの友情を感じているバッキンガムを救うために、陰謀を彼に伝えることを提案し、四人の間は、バッキンガムの腹心でミレディーの義兄でもあるウィンテル伯爵（彼女はアトスのあと、ウィンテルの弟と結婚したのだが、その男はなぜか結婚後すぐ亡くなったという）に事情を伝える手紙を出す。ミレディーは、バッキンガムがフランス遠征の準備をしているポーツマスに単身乗り込むが、そこでウィンテル卿に捕えられ、彼の居城に幽閉される。しかしここでミレディーは、なみはずれた悪女としての才を発揮し、牢番であった清教徒の軍人であるフェルトンを、彼女自身も清教徒であると装ったうえ、バッキンガム（その贅沢と好色の癖は清教徒たちの憎悪を買っていた）に性的虐待を受けたと信じさせることで籠絡し、自分の幽閉を解かせ、さらには彼にポーツマスの司令室に乗り込んでバッキンガムを暗殺させる。バッキンガムは、ちょうどそのとき届けられたアンヌからの彼の身を案じる手紙を読み、想いの人に愛されていることを唯一の心の慰みとして逝く……

舞台はフランスに戻り、これまで激しいつばぜり合いを演じてきた四銃士とミレディーが、誘拐されたコンスタンスを巡って最後の死闘を繰り広げることになる。枢機卿に誘拐されたコンスタンスは、その後王妃によってフランス北部のベチューヌの僧院に匿われていたのだが、それを知ったミレディーはイギリスからの帰途すぐさまそちらに向かう。四人の銃士もその跡を追うが、紙一重で悪女がさきにダルタニャンの恋人との会見を果たす。ミレディーはコンスタンスを別の場所に移す計画だったが、ふたりが話をしているさいちゅうに、銃士たちの馬のひずめの音が聞こえてき、ミレディーはとっさに毒の入ったワインをコンスタンスに飲ませ、彼女を置いて自らは逃亡する。ダルタニャンとコンスタンスはついに再会を果たすのだが、すぐに毒は彼女の全身を侵し始める。自らの腕のなかで亡くなる恋人を目の当たりにしたダルタニャンは、絶望のあまり気を失うが、つねに冷静なアトスの指導のもと、稀代の悪女に鉄槌を加えるべく、気を立て直す。一行は、主君の復讐のためイギリスから駆けつけたウィンテル卿、また村はずれの小屋に住み村人から恐れられている死刑執行人を伴い、偶然手に入ったミレディーのロシュフォールへの伝言を手掛かりに、フランドルとの国境の町アルマンティエールの隠れ家で、ついに悪女を発見する。小屋へと乗り込んだ男たちは、それぞれミレディーに関する罪状を述べたて、急ごしらの裁判を行って、全員一致で彼女に死刑を宣言する（そこで偶然〔!〕死刑執行人が、じつはミレディーがアトス以前に、僧籍にあったのを誘惑し〔その際ミレディーの肩に烙印が押された〕のちに殺害した男の兄であったことが判明する）。ミレディーは死刑執行人の手で、川向うの荒涼とした野で処刑される。

重い心を抱きながら、戦地へと帰る四人の銃士たち。そこにロシュフォールがリシュリューの命で、ダルタニャンを捕えに来る。ラ・ロシェルで、枢機卿をまえにして国家背任とミレディー殺しの罪に問われたダルタニャンは、枢機卿に例のアトスが奪った赦免状を見せる。だが彼には、そうした紙切

れなどリシュリュウのまえでは役に立たないことを理解している。彼の運命は宰相の一存にかかっているのだ(映画などでは、赦免状が提示されそれで一件落着となりハッピーエンドを迎えるというのが常道だが、デュマの原作ははるかにニュアンスが複雑である)……と、リシュリュウの裁決はなんと、自らを敵に回して数々の勲を立ててきた若い騎士の勇気と能力を国家に有意と考え、国王付き近衛銃士隊の副隊長として抜擢するというものであった。ダルタニャンはリシュリュウの器の大きさに感動しつつも、若輩ゆえそのような大役は先輩の三銃士、わけても彼らの頭目的存在であるアトスにこそふさわしいと枢機卿にも言い、また実際彼らに大任を引き受けてくれと頼むのだが、みなは一致して彼を推す。ダルタニャンは、銃士たちの友情に感じ、またそうした責任ある国家的要職を引き受けることで、自らの冒険に満ちた青春時代が終わることを意識し、涙を流す……実際その後、三銃士たちはみな隊を離れ、それぞれ別の道を歩んでいくことになる。ポルトスは、公証人が死んだためその後家の姥桜と結婚して彼の望んでいた豪華で安逸な暮らしをすることになり、アラミスはついに軍籍を離れ僧院に入ったことが伝えられる。そしてもともと名門貴族の血統であるアトスは、領地を相続したことから、俗世を離れた隠棲的生活を送ることになる。一心同体を誇り、数々の冒険を乗り越えてきた四銃士は、ここに解散する。彼らはその二十年後、ふたたび運命的な出会いをすることになるが、冒険と友情に彩られた青春の日々は永遠に終わりを告げたのであった。

#### 史実と虚構の混然一体——「歴史異聞」の導入

それでは、『三銃士』における史実と文学的創造の関係を見ていこう。

まず主人公であるダルタニャンであるが、彼は意外の感を持たれる方もいるかもしれないが、リシュリュウ、マザランに仕え、ルイー四世親政時代に国王付き近衛銃士隊長を務めた実在の人物である(4)。だが、その人物に関する資料としてデュマが選んだのは、ガティアン・クルティル・ド・サンドラスという一七世紀末から一八世紀初めにかけて活躍した文士の、『ダルタニャン氏の回想録』という自伝のかたちを装った文学的創作物であった。それは、いちおう実在のダルタニャンの大まかな生涯を追いつつも、その内容はひじょうに虚構性の高いものなのだ。そしてデュマは、その種本から小説の冒頭部分のストーリーをほとんどそのまま拝借している。すなわち、故郷の南仏の村からパリに上るとちゅうで宮廷貴族と喧嘩になり紹介状を奪われ、その後パリでトレヴィル殿を訪ね、そこで近衛銃士隊に属するアトス、ポルトス、アラミス(『回想録』では兄弟ということになっている)(5)と意気投合し、リシュリュウ付き護衛士と決闘に及んで勝利し、三銃士と熱い友情で結ばれるまでである(またのちの部分では、イギリスでミレディーという貴婦人と出会い、彼女と愛憎関係に陥ることも、クルティルの本に書かれている! )。

つぎに『三銃士』のなかで重要な位置を占めるダイヤの飾り緒事件であるが、これはデュマの創作によるものである。だが、その背景となるアンヌ王妃とバッキンガム公の危険な恋の火遊び、そしてルイー三世とリシュリュウの嫉妬というまさに国家中枢における感情関係は、同時代のいくつもの回想録が言及しているのである(とくに半世紀ものあいだ国王一家に仕えた侍従ラ・ポルト——彼は「銃士三部作」でもなにか顔を出す——のもの、またアンヌ王妃の侍女モットヴィル夫人のもの)。また、アンヌがバッキンガムに豪華な飾り緒を贈ったという歴史書の記述もあり、さらには、王妃と公のあいだを仲介した侍女が、リシュリュウによって国外追放にあったという同時代の証言もある(6)。デュマは、こうした同時代の回想録などに書かれているさまざまな情報をもとにして、英仏両国にまたがる四銃士とミレディーの激しい飾り緒の争奪戦、そしてコンスタンスの誘拐事件といった波乱万丈の物語を生み出したのである。

つづいてラ・ロシェルの攻囲とバッキンガムの暗殺であるが、これは前述のように歴史的イベントであ

る。リシュリューは、バッキンガムの死によって孤立状態に陥ったラ・ロシェルを、一年以上にわたる兵糧作戦によって陥落させ、強力な中央集権国家形成への大きな足掛かりを得た。だが、バッキンガム暗殺に至る経過については、当然ながら作者は強力な文学的創作を加えている。リシュリューによってイギリスに単身派遣されたミレディーが、四銃士にことを知らされたウィンテル卿の妨害にもかかわらず、牢番フェルトンを洗脳して暗殺を行わせるスリリングな過程は、デュマの創造的天才の生み出したものである。実際の海軍士官フェルトンの暗殺の動機は、士官昇格を巡ってのバッキンガムにたいする個人的遺恨（それと、公にたいする彼の清教徒としての反感が絡んでいた可能性はあるだろう）だと言われている（7）。

さて、こうした実際あった歴史的事件のなかに虚構の人物を配し、その活躍によって事件の内容を大きく作り変えてしまう「歴史異聞」とでもいうべき手法は、今後銃士三部作でデュマが大いに活用していくものであり、これはその最初の表れとして注目すべきである。またその手法は、デュマ以降歴史を扱う小説や映画においてひじょうな繁栄を見ることになるのであり、デュマがその創始者であるとは言えないが、その普及にもっとも大きな影響を与えた作品のひとつであることは間違いなく、デュマのサブカルチャー的文化史における大きな位置を証するものと言えるだろう。

ダルタニャンとミレディーの葛藤、コンスタンスを巡る四銃士とミレディーの最後の闘争と後者の処刑、ダルタニャンの逮捕とリシュリューによる赦免は、もちろんデュマの創作になる。

以上見てきたように、デュマは『三銃士』を書くにあたり、ダルタニャンの「偽回想録」というまさに虚実の融合した文学作品から出発し、その後も歴史資料のうちに自らの強力な物語創造能力を傾け入れることで、波乱万丈の物語をものして行ったという過程が浮かび上がってくる。この銃士三部作の第一作においては、虚実がまさに混交しているが、虚構が歴史にたいし優位に立っていると言える。第二作以降は、その関係がしだいに変わっていくことになるだろう。

## デュマの歴史像

さてそれでは、こうした虚実の混然となったデュマの小説世界は、どのような歴史像を読者に提示していると言えるのだろうか。

『三銃士』におけるデュマの歴史像の最大の特徴は、歴史における個人の重要性が極端に強調されている点である。『三銃士』において歴史を動かす最大の動因になっているのは、フランス王妃アンヌ・ドートリッシュを巡っての、国王ルイ三世またリシュリューとバッキンガムという時の英仏両国の最高権力者の恋のあつれきである。それがまさに、作品前半の中心的部分をなす「ダイヤの飾り緒事件」を生み出すのであり、また後半の山場であるラ・ロシェル攻囲という歴史的事件の——デュマによれば——根底的要因をなしている。そして、こうした権力者の個人的感情関係を背景として、またダルタニャン、三銃士たち、ミレディーという個人が大活躍をする。前者は、一心同体の連携でロンドンまで辿りつき飾り緒を取り戻すことで、フランス国王夫婦の最大の決裂の危機を救い、後者は、女だてらに単身イギリスに乗り込み、フェルトンを操縦することで、バッキンガム公暗殺という、ラ・ロシェルの攻囲という歴史上の大事件の最大の転換点となる行為をなし遂げる。さらに言えば、主人公ダルタニャンはこうした展開のなかで、一地方貴族に過ぎないにもかかわらず、国家の最高権力者であるリシュリュー枢機卿と対等に渡り合い、敵国の宰相であるバッキンガムに身の危険を知らせるといふ、国家背任的行為を行ったにもかかわらず、最終的には枢機卿にその能力を認められ、国家的要職に任命される。ここには、まさに英雄史観と言えるようなものが表れており、個人がその信じるところにおいて行動し輝かしい動をなし、それが度量を兼ね備えた権力者によって評価され顕彰されるという、幸福な英雄的時代のイメージが前面に現れているとも言える（8）。

デュマの創造した歴史的世界のふたつめの特徴は、その歴史的記述の細部の緻密さに表れている。ジュリー・アンセルミーニは、デュマの作品が、ときに歴史的事件のねつ造やアナクロニズムを侵しているにもかかわらず、回想録など一七世紀の文献世界を丹念に写し取ることで、時代の雰囲気・香りを見事に再現していることを指摘している(9)。衣装などの細密な描写、当時使われていた独特な古語の巧みな組み込み、そしてとりわけ登場人物の習俗の指摘により、作者は、ロマン派美学の重要な構成要素である「地方色」の時系列的ヴァリエーションである、「時間色」の実現に成功しているという。

たとえば、ダルタニャンがワルド伯を騙って、ミレディーとまんまと一夜を伴にして平然としていることを語ったのち、デュマは以下のように付け加える。

「いずれにせよ、ある時代の人間の行動を別の時代の尺度ではかるのは少々無理であろう。今日でなら体面を重んじる人に恥辱と考えられることでも、その時代には何でもない普通のことであったので、良家の部屋住み子弟などは大抵、情人に養われていたと言っている。」

On aurait tort au reste de juger les acitons d'une époque au point de vue d'une autre époque. Ce qui aujourd'hui serait regardé comme une honte pour un gallant home était dans ce temps une chose toute simple et naturelle, et les cadets des meilleures familles se faisaient en général entretenir par leurs maîtresses. (10)

実際こうした変装や演技によって他人の恋人を奪うことは、一七世紀の演劇や小説などでは一般的であって(11)、作者は当時の膨大な文献の渉獵からそのことを把握し、ここではそれを、一九世紀とは異なる一七世紀独特の習俗として提示している。こうしたデュマの手法は、ある時代に特有の<sup>マンダリテ</sup>心性を提示するアナール派歴史学の手法を想起させる。彼の同時代文献資料の徹底的な読み込みはこのように、彼の歴史描写に思いがけない現代性を与えることがあり、このことは、デュマの歴史観の文学史における一般的評価の低さを考えると、大いに強調しておきたい。

ところで同じアンセルミーニは、イギリスのウォルター・スコットの作品以降、一九世紀に歴史小説が絶頂を極めてくることの要因として、三つの事柄を挙げている(12)。ひとつは、産業革命で人々の生活が急速に近代化・煩雑化してくる時代において、一種の逃避的装置、時間的エキゾチズムが求められていたこと。ふたつめは、一八世紀末以降の革命の時代、政治体制の度重なる劇的な変化のなかで、いわば過去との断絶が生じ、そうした歴史的裂け目を埋め、国家的アイデンティティを再構築する必要が生じていたこと。そして最後に、ミシュレらの当時の共和主義的な進歩派の歴史家たちが、王たちの歴史に代わるものとして、人民の歴史を標榜していたこと。そして歴史小説は、そうした要求に応える豊かな可能性を持っていたというのである。さて、以上のような歴史小説流行の要因は、さきに挙げたデュマの歴史像の特徴に、分かりやすい大衆的レベルにおいて、同時代のどの歴史小説よりもよく合致していたと言えるのではないか。ふたつめの特徴として挙げた歴史的細部の緻密さによって時代の生き生きとした雰囲気を現出させることは、当然エキゾチズムの欲求に応えるものであったろうし、とりわけダルタニャンらが国家の権力者にたいし堂々と渡り合う姿勢は、人民のための歴史という当時の進歩的歴史学のコンセプトにも合致するものであったろう(ミシュレは、デュマの歴史小説を評価していたという)。さらに、いま述べたようなデュマの描くアンシャンレジームの歴史的世界に酔った当時の読者たちは、大革命によっても断絶することのないフランスの高貴で輝かしい国家的アイデンティティを実感し、国民国家の一員としての意識を新たにすることができたはずである。デュマの歴史小説の、今日ではちょっと想像しがたい面もある、社会現象的な圧倒的な成功の要因には、こうした当時の社会の抱えていた集合的な歴史にたいする欲望に、きわめて的確に応えていたことがあったと考えられる。

## 青春教養小説

しかし、『三銃士』という作品は、たんに歴史小説という一文学ジャンルに還元されない複雑さを有している。それは、若き主人公ダルタニャンの成長を描く青春小説、教養小説としての面も兼ね備えているのだ。パリに出てきたばかりの彼は、とかく血気にはやり、誰彼と見境なく決闘に明け暮れていた。それが、三銃士という先輩の軍人（とくに人生経験豊かで聡明なアトス）と交わり、さまざまな国家的重要性を有する事件を経験するうち、そのもともと鋭かった冷静な実践的知性を開花させていく。また感情的にも、コンスタンスとの純愛、そしてミレディーとの欲望の赴くままの肉体的愛、そして後者との浮気が原因となった最愛の恋人の死という悲劇を経験することで、成熟していく（13）。国家背任の罪を問われて宰相リシュリューのまえに立った彼は、パリに出てきたばかりのやみくもに喧嘩を売っていた青年とは別の存在になっている。彼は自らの咎を素直に認め、その身を宰相に一任する。そして、こうした青年の成長を認めたりシュリューは、彼を国家的要職に任用するのである……だがそれは、梗概の部分でも書いたように、冒険そして友情と恋に満ちた青春の終わりの時でもあった。これからは、国家的責任を背負った成熟の時代が始まるのである。アトスとの会見のさい彼が流す涙は、そうした青春の終わりを悟ったゆえのものであった。四人の銃士たちは、その後まったく異なった道を歩んでいき、「二十年後」に彼らがふたたび出会ったさいには、『三銃士』時代とは違った成熟した男たちの新たな友情の物語が始まる。このように、「銃士三部作」は、主人公たちの成長、また半世紀にわたる友情の変遷を描いており、それが他の歴史小説には感じられない厚みのある人生の機微に触れるような感動を読者に与えることになるのである。

以上、『三銃士』における史実と虚構の混交状態を分析し、そこに虚構性の優位を見たのち（そこで萌芽的に使用されている「歴史異聞」とも呼ぶべき手法は、その後の三部作の展開のうえで大きな役割を果たし、さらにデュマ以降の歴史を扱う芸術作品もそれを頻用していくゆえに、重要視する必要があった）、『三銃士』が呈示する歴史像の最大の特徴である歴史における個人の重要性の強調、とりわけダルタニャンら下級貴族が国家の最重要人物と対等にやりあう姿が、歴史的細部の豊かな描写（なかでも、二〇世紀の心性史を先取りするような記述は注目に値した）とあいまって、当時歴史小説が要求されていた国民国家における人民史の構築と、革命によっても断絶しない国家的アイデンティティの確保というプロブレマティックに、大衆的レベルできわめてよく適合しており、それが当時の社会現象ともいえる人気につながっていたことを指摘してきた。そして最後に、『三銃士』が他の同時代の歴史小説には見られない、青春教養小説という面を持っており、その後も主人公たちの成長を追い、人生のすべてを描く企図を持っていることから、歴史小説、冒険小説の歴史に新たなページを付け加えていることを指摘した。

その後『三銃士』は、演劇、映画、テレビドラマ、さらには漫画など様々なメディアを横断して、無数のアダプテーションを生み出し（14）、まさに文学的神話体系と言っても過言ではないようなものを形成しており、主人公ダルタニャンは、「冒険的ヒーローの原型」（15）とも見なされている。それは、とりわけサブカルチャー文化史において巨大な重要性を有していると言える。「銃士三部作を読む」今後は、デュマの続編を順次扱い、その歴史小説としての変遷を追うとともに、その文化史における存在意義にも光を当てていきたい。



## 註

- (1) 日本では鈴木力衛による全訳が、『ダルトニャン物語』として講談社文庫から全一一巻で出ていたが、現在では絶版になっている。なおその版は、一一巻が通しで刊行されており、「三部作」としての区別は表面上消えている。『三銃士』単独では、生島遼一による岩波文庫版を初めとして、いくつかの版が現在も入手可能である。
- (2) デュマの生涯については、以下の文献を参照。《Chronologie de la vie et des œuvres d'Alexandre Dumas》in *Dumas, Les Trois Mousquetaires, Vingt ans après*, édité par Gilbert Sigaux, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1962, pp.XXVI-LXIV. 辻昶, 稲垣直樹共著、『アレクサンドル・デュマ』, 清水書院, 二一四—二二六頁。
- (3) 『三銃士』のテキストと翻訳は、以下を参照。*Dumas, Les Trois Mousquetaires, Vingt ans après*, Gallimard, Pléiade, 1962. アレクサンドル・デュマ, 『三銃士』上下巻(生島遼一訳), 岩波文庫, 一九七〇年。
- (4) 実在のダルトニャンの生涯に関しては、以下の佐藤賢一氏の著作が詳しい。『ダルトニャンの生涯—史実の「三銃士」』, 岩波新書, 二〇〇二年。
- (5) アトス, ボルトス, アラムスも, じつは実在の人物である。彼らは実際には, みなダルトニャン同様南仏はガスコーニュの出身で, 近衛銃士隊に所属したことがあるのだが, デュマは彼らにまったく独自の経歴を与え豊かな個性づけを行っている。Cf. Henri d'Alméras, *Alexandre Dumas et les Trois Mousquetaires*, Edgar Malfère, 1929, pp100-102.
- (6) Cf. D'Alméras, *op. cit.*, pp.91-92, 105-112.
- (7) Cf. Yoro Ba, *Histoire et Création littéraire dans les Trois Mousquetaires d'Alexandre Dumas*, Edilivre, 2010, p.61.
- (8) 今後詳しく論じていくことになるだろうが, こうした英雄的時代のイメージは, 「三部作」が展開し, マザラン時代, ルイー四世親政時代となるにしたがい, デカダンスの様相を呈することになる。また, リシュリュー像に関して言えば, この最後の部分では偉大さの相貌のもとに描かれることになるものの, ヨロ・バも指摘するように, それ以前の部分では, 小説全体が恋愛関係に基づく善悪二元論的構造を取り, 枢機卿は嫉妬深い敵役の役割を担うだけに, 否定的ニュアンスで提示され, 逆にアンヌやバッキンガムは, 恋愛悲劇のヒロイン・ヒーローというかたちで, 肯定的に提示される。こうした描き分けは, バも指摘するように, 史実からはかなりかけ離れた, 偏った描写であると言える。Cf. Ba, *op. cit.* premiere partie et deuxieme partie.
- (9) Julie Anselmini, *Étude sur Les Trois Mousquetaires d'Alexandre Dumas*, Ellipses, 2008, pp.34-37.
- (10) 前掲生島遼一訳岩波文庫版, 下巻八四頁。Dumas, *op. cit.* (Pléiade), p.401.
- (11) Cf. 矢橋透, 『劇場としての世界—フランス古典主義演劇再考』, 水声社, 一九九六年。
- (12) Anselmini, *op. cit.*, pp.10-11.
- (13) その後の父親的存在であるアトスの導きによって, 悪魔的存在であるミレディーを処刑する過程には, 供儀的なイニシエーションの儀式を思わせるところがある。こうした部分には, 精神分析的, フェミニズム的視点からの批判的分析(それは, 『三銃士』という作品全体にわたって濃厚な, ミソジニー的=ホモソーシャル的傾向にも適用されるべきだろう)も必要とされるであろう。
- (14) ダニエル・コンペールはその著作の最後に, 映画・テレビにおける『三銃士』のアダプテーションのリストを掲げている。それによれば, 著作が出た二〇〇二年の段階で, 純粋に『三銃士』を扱った作品だけでも, 世界中で二八篇の映画と一〇篇のテレビドラマが作られている。Daniel Compère, *D'Artagnan & C<sup>ie</sup>—Les Trois Mousquetaires d'Alexandre Dumas:un roman à suivre*, Encrage, 2002, pp148-150.
- (15) Alain Vaillant, *Histoire de la littérature française du XIX<sup>e</sup> siècle*, Nathan, 1998, p.179.

